
バカたちの温泉旅行

SHIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカたちの温泉旅行

【Nコード】

N6404V

【作者名】

SHIN

【あらすじ】

幸運？にも温泉団体チケットをあててしまった雄二
そんな訳でいつものメンバーで温泉に行くことになった
温泉旅行ではいったいなにが起こるのか？？

連載のつもりが短編になってしまっていたのでもう一度投稿しました

ある金曜日（前書き）

作者の頭は色々残念な上文章力が皆無なので色々悲惨な部分があるとおもいます。

一応明久×姫路にしたいと思っています。

駄文になること間違いなしですがよろしく願います!!
すいません手違いで短編になってしまいました（汗）
本当は連載のつもりです。

ある金曜日

隠してもどうせすぐ翔子にばれちまう……
こうなったらあいつらも巻き込んでやる

（金曜日の放課後）

「明久温泉に行かないか？」

「……雄二浮気は許さない」

「ぐああああ」

霧島さんは雄二にアイアンクローを決めていても絵になるな
とっそんなことより

「雄二僕にそんなお金がないこと知ってるよね？」

「その点なら問題ない昨日くじ引きで団体温泉チケットが当たったんだ」

雄二アイアンクローをされながらしゃべれるなんてやられなれてるね……

あっなんか霧島さんから黒いオーラーみたいなのが見える

「……どうして私を誘ってくれないの？」

「翔子落ち着け団体と言つてぎやああああ」

「本当に霧島さんは雄二一筋だね」

「明久くんやつぱり坂本くんと・・・」

「なに言ってるの姫路さんぼくはちゃんと異性について美波僕の肘はそっちには曲がらないよおおお」

バキユさよならぼくの右肘

「全くお主らはいつも騒がしいのう」

「・・・撮影のじゃいや何でもない」パシャパシャ

「ムツツリーニくんそんなに女の子の写真を撮りたいなら僕がモデルになってあげよーか？」

「・・・自惚れるなおまえには興味ない」

「そっか残念だねせつかく今日はスパッツをはいてないのに」チラッ

ブシャアアアア

「全くお主らはお主らでよう飽きんのう

して雄二よ団体と言っておったが何人まで行けるのじゃ？」

「8人までだからここにいるメンバーでいいだろ」

「雄二そんな勝手に決めたらダメだよ。姫路さんは大丈夫？」

「はい私は大丈夫です」

「／／／それはよかった」

やばいあの笑顔は直視できない

「ウチも大丈夫よ」

「ワシも今週は部活がないから大丈夫じゃ」

「・・・問題ない」

「僕も大丈夫だよ」

「よし決まりだな

じゃあ俺の家に明日の朝8時に集合で大丈夫か？」

「んゝ僕は場所がわからないからムツツリーニ君案内お願いね」

コクリ

「・・・明日ここに7時集合で大丈夫か？」

「うん大丈夫だよ」

「明日遅れたら置いていくから遅刻するなよ特に明久」

「大丈夫だよ」

「それならいいじゃあもう今日は帰るか明久いつものように頼んだぞ」

「了解」

く帰り道く

明久side

清涼祭の事件以来姫路さんと一緒に帰ってるけどこの時間はとって
もいやされるや

「明久くん温泉楽しみですね」

「うんとっても楽しみだよ」

「明久くんはよく温泉とか行くんですか？」

「昔はよく行ったけど最近行ってないかな」

「そうなんですか」

実は私温泉初めてなんですよ」

「えっそうなの!？」

「はいだからどんな物を持って行けばいいかわからなくて」

「それなら大丈夫だよ

着替えさえあれば何とかなるよ後は自分の好きな物を持ってくるだけ
でいいよ」

「わかりました」

「荷物は結構な量になるからばくでよければ荷物運び手伝おうか？」

「そんなの悪いですよ」

「気にしないでいいよどうせぼくはこんなことしかできないから」

「・・・・・・そんなことはありませんよ」

「ごめん姫路さんよく聞こえなかったよ」

「気にしないでください」

えっとじゃあお願いしてもいいですか？」

「もちろん」

「お願いします」

じゃあ私こっちなので」

「家まで送らなくて大丈夫？」

「すぐそこなので大丈夫ですよ」

「じゃあ明日は7時30分にこの場所でもいい？」

「はい明久くん遅刻しちゃダメですよ」

「任せてまた明日ね姫路さん」

そういつてぼくは歩き出した

まって今考えて見たらばくとっても大胆だった！？

やばい顔が赤くなってきた気がする

・・・まあいつか大好きな姫路さんと一緒にいれる時間が増えたんだから

そうと決まったら今日は早く寝よ

side out

姫路side

私の密かな楽しみ

それはわかれた後の明久くんの中を見つめること

さつき明久くんはこんなことしか出来ないなんて言っていましたが一んなことありませんよ

明久くんは私に色々な大事なものをくれていきますよ

私はそんな明久くんが大好きです

この思いを伝えたら明久くんはどうしますか？

もしかしたら距離を置かれちゃうかもしれないね

でもいつかこの気持ちを伝えますから待っていてくださいね

こうして夜は更けていった

ある金曜日（後書き）

我ながらぐちゃぐちゃですねはい．．．．．

こんな文章につきあっていただきありがとうございます。

感想などお待ちしております。

道中（前書き）

更新遅くなりました

道中

明久side

午前4時

しまった昨日調子にのって早く寝過ぎちゃった
どうしよう全く眠れる気がしない
しょうがないから荷物の確認でもしとこうかな

着替え よーし

タオル よーし

お菓子 買うお金が・・・

トランプ よーし

・

・

・

AED 一応持って行っておこう...

うーん荷物整理も終わっちゃった

午前6時

だいぶ早いけど集合場所に行っちゃおうかな
ここにいたらまた眠っちゃいそうだし

そうしてぼくは出発した

明久side out

姫路side

午前2時

どうしましょう

わくわくしすぎて眠れません

荷物の準備もさつきしましたし…

こうなったら明久くんのために料理でも作って行きましょう

朝と言ったらやっぱりおにぎりですよ

確かお米がなかったので炊かないといけませんね

まず洗剤を入れてつと

後はかき混ぜるだけです

ジャージャージャー

次は中の具ですね

定番は鮭ですけどいりきたり過ぎるので

鉄分をとってもらうために鉄を入れてそこに硫黄を混ぜて

暖かくして食べてもらいましょう

あれ確かこころに硫黄があつたはず

ガサゴサ

おかしいですねこつちでしたっけ？

あつありましたちよつとしかありません…

しかたありません

これを入れて鮭と一緒に炒めて完成です

さて反応が終わる前に包んで…これでいいですね

午前6時

だいぶ早いですけど出発しましょう

そういつて私は出発したのです

姫路side out

「集合場所」

あそこを曲がった到着だね

「うわっ」

「きゃっ」

「「あつすいません大丈夫ですか？」」

この声は

「姫路さん」

「明久くん」

「姫路さんまだ集合時間じゃないよね？」

「はい

明久くんこそこんなに早くどうしたんですか？」

「実は楽しみすぎて目が覚めちゃったんだよ」

「私もです」

「でも2人して困ったね

雄二がこんな朝早くに起きてるわけないし・・・」

「そうですね

じゃあ私早起きしちゃったんでおにぎりを作ってきたん」「よし雄二の家に行こう」で…わかりましたそうしましょう」

今姫路さんが悲しんでるように見えたけど・・・
姫路さんには悪いけど今は自分の命が大事だ！！

「おっやつと積極的になったか」

「そうですもつとグイグイいきなさい」

？なんで天使と悪魔のぼくがしゃべってるんだろう？

姫路さんの手

それを引っ張っているぼくの手

真っ赤な顔の姫路さん

「ごごごめん姫路さん」

手を離すべく

少しがっかりする姫路さん

いついけないこのままじゃまた手をとっちゃう

「そっそっだ荷物を持つよ」

「ブツブツ」

「姫路さん？」

「えっあっはい」

「どうしたの？大丈夫？」

「大丈夫です」

それより明久くんどうしたんですか？」

「荷物持とうか？」

「そんなに量がないので大丈夫ですよ」

そういつて姫路さんは歩き出した

今雑談をしている最中だ

「姫路さん見てカナブンが
つてどうしたの姫路さん」

ボクノウデニヤワラカイモノガアタツテル

「すいません飛んでる虫は苦手なんです」

「そそそそうなんだ」
頑張るんだばかりの理性

「重い・・・ですね」

「そんなことないよ」

「重かったら言ってくださいね」
ちよつと待ってください

もしかして私すごく大胆なことしてます？

「姫路さん顔が真っ赤だけど大丈夫？」
まあぼくも真っ赤だと思うけど……

もしかしたら熱かもしれないし

「大丈夫ですよ

明久くんも真っ赤ですけど大丈夫ですか？」

もし私と同じ理由ならうれしいです

「こっこれは…気にしないで

それよりも姫路さんちよっとは落ち着けた？」

「はい

ですけどこの格好落ち着くのもうちよっこのままでもいいですか？」

「／／／もちろんだよ」

姫路さんの上目遣いかわい！！

このまま襲っちゃってもいいかな？
って

「それじゃただのけだものじゃないかああああ」

「！！明久くんどうしたんですか！？」

「ごめん出来たら気にしないで…」

「そうですか

わかりました」

「ありがとう助かるよ」

「そんな

ところで明久くん坂本くんの家はあとどれくらいなんですか？」

「んーだいたい１０分ぐらいかな」

「そうなんですか」

この幸せな時間はあと１０分で…

「行く姫路さん」

「はい」

そうしてぼくらは雄二の家に向けて歩き始めた

道中（後書き）

こんな駄文を読んでいただき誠にありがとうございます。
ネタがまとまらずこんなぐだぐだになってしまいました。
次からはもうちょっと早く更新したいと思います。

だめ出しなどお願いします。

道中part2（前書き）

まあさん感想ありがとうございます。

道中part2

午前6:30

「早く着きすぎちゃったかな」
「なにして待つところかな」

ただ待つてるだけじゃつまらないから隠れて驚かしちゃえ
そうと決まれば隠れる場所は・・・

「・・・工藤すまない待たせた」

「!!!!ムツムツリー二君!?

急に話しかけられたからびっくりしたじゃない」
「本当は隠れようとしたからだけどね

「・・・すまないそんなつもりはなかった」

「それより来るの早いね」

「・・・たまたま早く目が覚めただけ」
「サッ

「なんで目そむけたの!？」
「もしかしてこの服そんなに似合っていない」
「せつかくちゃんとした服着てきたのに・・・」

「・・・そんなことないとても似合っている／／／／」

「／／／／ほんとに」

すっごくうれしい

「・・・こんなところで嘘をついても仕方ない」

「ありがと ムツツリー二君もその服似合ってるよ」

「・・・ちよつと照れる」

「そろそろ坂本君の家に向かわない？」

「・・・そうしよう」

きつ気まずい

この空気はいつたいなに!?

だいたい今日の僕はおかしいよ

妙にそわそわしてるし早く起きちゃうしいつもなら

実はムツツリー二君がスカート大好きって言ってたから着てきたんだよ

もちろんスパッツなしでね

ぐらいは言ってるはずなのに

相手がムツツリー二君だからかな・・・

きつとそうなんだよね

うん悩んでもしょうがない頑張っでいつも通りに

「ムツツリー二君実はね」

「・・・?」

「今日スパッツはいてないんだ」

タラッ

「・・・俺は騙されない」

「ほんとだよ」

チラッ

ブヤアアア

「・・・我が人生一片の悔いなし」
グテ

「ムツツリー二君大丈夫!？」

「・・・問題ないただの高血圧」

「それ絶対ダメな高血圧だよね
っていつか高血圧で鼻血が出るの!？」
まさかほんとに見えちゃった

「ムツツリー二君何色だった？」

「・・・白」

「やっぱり見えたんだ」

「・・・見ていない
そもそもお前に興味はない」

このセリフ前にも言われた気がする・・・

「・・・工藤どうしたんだ？」

そんな泣きそうな顔をされたら悲しい

「ごめん

なんでもないよ

ただやっぱり僕なんかに興味はないんだなって思って
「そうだよ僕なんか・・・」

「・・・そんなことはない」

「え？？」

「・・・俺はお前に興味津々だ／＼／＼／」

「／／／／／」

「・・・もう少しで着く行こう」

「うん」

この旅行で何かあればうれしいなムツツリー二君・・・いや康太君と

道中 part 2 (後書き)

思ってた以上にぐだぐだになってしまいました。
すいません。

これからも更新頑張るのでよろしくお願いします。
感想、アドバイスお願いします。

雄二家にて（前書き）

大暴投さんアドバイスありがとうございます。

またこんな小説をお気に入り登録してくださっている皆様ありがとうございます。

これからも応援よろしくお願いします。

ではどうぞ

雄二家にて

「やっと着いたね」

「そうみたいです」

「さあどうして雄二を起こそうか」

「やっぱりこんな時間に起こすのは坂本くんが悪いので、あそこの公園で（ちよつ翔子なんでここにiiiiiiii）」

「起こす必要はなさそうだね」

「はい・・・」

「じゃあ入っちゃお」

「そうですね」

ピンポン

「・・・どちら様ですか？」

「あつ霧島さん吉井です」

ガチャ

「・・・いらっしゃい吉井に瑞希」

「翔子ちゃんおはようございます」

「朝早くに邪魔してごめんね」

「……大丈夫雄二もさつき起きたところ」

「ところで霧島さんはどうやって言えに入ったの？」

「……御母様にもらったから」

「ってことは……毎日雄二を起こしに？」

「……？もちろん」

「姫路さんさつきのおにぎりもらえる？」

「はい。」

実はちよつと材料が足りなくて、中身が入ってるのが一つしかないんです

「どれかわかる？」

「一番暖かいものなのでこれです」

「ありがとね、姫路さん。」

立ち食いは行儀が悪いから雄二の部屋で食べてくるね

「……後でお茶を持って行く」

「気を遣わせちゃってごめんね」

「……気にしないでいい」

明久side

待つてる雄二

毎朝霧島さんに起こしてもらっているなんて妬ましい

「やあ雄二朝から叫んじゃ、家の人に迷惑でしょ？」

「いや初めは色々言われたが最近慣れてきやがった」

「そうなんだ。」

きつとなにも食べてないと思ったから差し入れ持ってきてあげたよ
これで地獄に堕ちろ

「明久にしては気が利くじゃねえか」

「いつもだろ」

早く食べる

「じゃあ遠慮なくもらっぞ」

「どうぞどうぞ」

「暖かいな。」

中身が鮭であろう味がするのに食感がゴリゴリして飲みにくい
コテッ

「雄二?……雄二しっかりするんだ!!」

「ここは・・・」

「雄二帰ってこれでよかった」

AED 持ってきて本当によかった

「明久てめえなにを食べさせやがった？」

「ぼくたちをこんなに出来るのは1つしかないでしょ？」

「・・・お茶を持ってきた」

「ありがとう」

ごくごく

「霧島さんごちそうさま。

じゃあぼくはこれで」

「おい明久てめえ待ちやがれ」

「みんなが集まったら呼ぶから雄二をよろしくね」

「・・・わかった」

明久 side out

「明久くんおにぎりどうでした？」

「おいしかったよ」

具なしのほうはね

「よかったです」

「明久30分前に来るなんてどうしたのじゃ？」

「たまたま早く起きちゃって」

「アキってばどうせわくわくしすぎて目がさめちゃったんでしょ？」

「うつどうしてばれたの？」

「だってアキは単純じゃない」

「ひどいよ美波」

「うわゝみんな早いね」

「ムツツリー二に工藤お主らも早いの」

「それよりムツツリー二顔が赤い気がするんだけど大丈夫」

「・・・問題ない」

「愛子ちゃんも赤い気が」

「／／／／気のせいだよ」

「そういうことにします。」

夜しっかり話してもらいますから」

「だからなんにもないってば!！」

「やけに騒がしいと思ったら、やっぱりそろってたのか」

「雄二その縄はなに？」

「明久そのことについてはふれないでくれ・・・」

「雄二苦労してるんだね」

「坂本くんどうやって行くんですか？」

「ここにバスがきてくれることになっている」

「それはありがたいのう。」

して雄二座席はどうするのじゃ？」

「公平にくじ引きで決めよう」

「ルールはどうするの？」

「箱の中に1～4の数字を書いた紙を入れて引いていたらいいだ
ろ」

「了解」です」

2 雄二、霧島さん

3 秀吉、ムツツリーニ

4 ぼく、姫路さん

神様ありがとう

「アキ、隣が瑞希だからって変なことを考えるんじゃないわよ」

「もっもちろんだよ」

「瑞希ちゃんとは僕たちと違って大きいからね」

ブシャアアアア

「全くお主もあきんのう」

「アキまさかそんなことかंगाえてたの？」

「美波後ろに変なオーラーがってぼくの腕はそっちにはまがらない
いいいい」

このやりとりはバスが来るまで続いた・・・

雄二家にて（後書き）

まだ本題に行っていない気が・・・
きつともうすぐ行くと思うのでお願いします。

感想、アドバイスお願いします。

バス 前編（前書き）

漣桜音さん、唐笠さん感想ありがとうございます。

PV3500、ユニーク1000を突破しました。

こんなすごい数字が出るなんて思ってもいなかったのでもううれしいです。

ではどうぞ

バス 前編

「煩惱退散煩惱退散煩惱退散……」

「明久くんどうしたんですか？」

「えっいや、これは……そう車酔いにならない為のおまじないだよ」

「変わったおまじないですね」

「ははは」

神様、あなたからは悪意しかかんじられません……

だってなぜこんなに密着しているのですか？

（数分前）

「ねえ、なんだかこのイス狭くない？」

「そんなことねえだろ」

「ワシらのところも狭くないぞい」

「ウチ達のところもよ」

「じゃあもしかして僕たちのところだけ……」

「そう・・・みたいですね」

「さつさと座れ。」

「じゃねえとバスが出発しねえだろ」

「わかったよ」

「明久くんお願いしますね」

「こちらこそよろしくね」

でっ今にいたるけど

想像以上に狭くて

姫路さんが動いた時に姫路さんの髪からいいにおいが・・・
やばいマジで理性が

「明久くん大丈夫ですか？」

もうダメ

我慢出来ない・・・

「じゃなーーーーい

これじゃリアルに変態じゃないか!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「!?!明久くん本当にどうしたんですか？」

「うるせえ

それにお前が変態なのは今に始まったことじゃねえだろ」

「そうよアキ、アキは筋金入りの変態でしょ？」

「それに明久よ、いきなり叫ぶのは変態じゃぞ」

「・・・どうせ変なことを考えていた」

「ムツツリー二の変なことはほんとにやばいから」

「・・・(ブンブン)」

「それにしても、

みんなしてぼくをバカにするなんてひどいよ」

「吉井君変態なのは否定できないよね？」

「工藤さんまで!？」

「ぼくは変態じゃないよ!!」

「ふーん

この写真を見てもそんなことが言えるのかな？」

チラッ

「そっそれはみんなに着せられただけで・・・」

「まだ否定するんだね。

じゃあ入学式の時のセーラー服は「ごめんなさい。ぼくが悪かったです。」わかればいいんだよ」

「アキ入学式のセーラー服って」

「それは色々あったんだよ」

これ以上話を掘り返されたらばくは一生変態として生きていかなきゃならなくなっちゃう・・・

「それじゃあ吉井君、変態なのを認めるね？」

「はい」

「やっぱりお主はバカじゃのう」

「へ？秀吉なにを言ってるの？」

「さっきの会話をよく思い出してみるのはじゃ」

ぼくが変態扱いされる

みんなが肯定する

ぼくが否定する

工藤さんに阻止される
変態かと聞かれる

はいと答える

・・・

「しまったああああ」

「あははさすが吉井君。」

「からかい甲斐があるね」

「くそう工藤さんはかったね？」

「いや明久さっきのはお前が自ら度壺にはまっていったただけだぞ。それに・・・」

「それに？」

「お前は文句なしの変態だ」

「ちがーーーーう」

「・・・明久うるさいぞ」

「ムツツリーニまで！？ひどいよ」

「・・・隣なのに気づかないのか。
・・・よく見る」

「ぼくの隣で姫路さんが寝てる
グハア」

「あつ明久、吐血などしてどうしたのじゃ」

「ナンデモナイヨ」

「すぐく片言しゃべりになっておるのじゃが」

「・・・一枚300円」

「買った!!」

「・・・毎度あり」

それにしてもかわいい寝顔だな

なんだかぼくも眠くなってきた

ダメだせっかくこんな近くで見れるのにzzzz

姫路side

それじゃあ吉井君、変態なのを認めるね？」

「はい」

「やっぱりお主はバカじゃのう」

「へ？秀吉なにを言ってるの？」

「さっきの会話をよく思い出してみるのじゃ」

「しまったああああ」

やっぱり明久くんはおもしろいですね。

私はなにも取り柄がないので

明久くんの近くにいる資格もありません。

ですが神様お願いです。

もう少しこのままでいさせてください

姫路side out

明久side

寝ちゃってたんだ・・・

姫路さんの寝顔があるだけですごく落ち着く

きっとこれが好きな人と一緒にいられる幸せなんだと思う

ぼくは頭も悪いし、かつこいいとは言えない・・・

だけど影ながらでいいから好きな人や愛する人の幸せそうな寝顔を
守っていききたい

いやもしかしたら姫路さんはそんなことを望んでないのかも・・・

・・・頭がこんがらがってきた

難しいことを考えちゃったからまた眠くなってきたzzz

明久side out

雄二side

あいつら幸せそうに寝てやがるな

ほんとにあいつらはお似合いバカップルだな

それに引き替え俺は・・・

確かに俺は翔子のことが・・・好きだ

だが翔子は好きだと勘違いしてるだけなんだ

だから俺は翔子の愛を正面から受けることなんてできない
だが

「・・・雄二は雄二だからそのままでもいいzzz」

「翔子起きてるのか？」

「・・・・zzzzz」

なんだ寝言か

俺は俺のままでいいか・・・

そうなのかもな

ようは俺の気持ち次第だな

翔子もうちょっと待っててくれ

この気持ちに踏ん切りをつけたら

俺の正直な気持ちを正面から伝える

だからまだ待っていてくれ

雄sideout

眠れないのじゃ

ムツツリーニもダウンしとるし・・・

「おい誰か起きとらんかのう？」

ブーン

バスが走ってる音しかないのじゃ

「誰か頼むから相手してほしいのじゃー」

バス 前編（後書き）

秀吉ファンの皆さん秀吉を落ちに使ってしまいすみません（汗）
そしてなかなか現地に着かない・・

このままだと題名詐欺になってしまいますね（汗）
そうならないよう頑張ります。

感想、アドバイスお願いします。

バス 後半（前書き）

PV5000突破しました。

応援ありがとうございます。

これからも頑張るのでよろしく願います。

ではどうぞ

バス 後半

姫路 side

「誰か頼むから相手してほしいのじゃ」

今木下くんの声がしたような・・・

／／／／あああ明久くんの顔がすぐそこに
どどどどうしよう

今ここでキスしちゃってもばれませんよね

・・・やっぱりそれはダメですよ

たとえこれから先、明久さんと一緒にいられるかわからなくても
初めてのキスはお互い同意の上でしたいです。

でもこれぐらいのわがままはやってもいいですよ

コテッ

パシャ

??今何か聞こえたような・・・

きつと気のせいですね

それにしてもやっぱりすぐ落ち着きますzzz

きつと明久くんだからなんです

安心したらまたzzz

姫路 side out

「・・・いい写真が撮れた」

「おおムツツリーニやつと起きてくれたか」

「・・・眠いからまた寝る」

「そんなこと言わずにのう」

「・・・人は欲望に忠実な生き物zzzz」

「よく考えると

ベストショットの為だけに起きたのはすゝいの」

また一人じゃ・・・

「運転手さん後どれくらいで着くのでござろうか」

「後10分ぐらいなのでお連れの皆さんをそろそろ起こしていただけたらあらがたいです」

「了解したのじゃ

おーい皆の衆そろそろ着くぞい」

「あつ木下」「島田よ、お主もやつと起きたか。」

「実はあんたに言っておかなくちゃならないことがあるの」

「?言っておかんならんこととはなんじゃ?」

「ウチずっと起きてたの」

ん？天然バカツプルの声が聞こえてこない
！！！！

明久の肩に姫路がもたれかかって寝てやがる
こんなの翔子のやつが見たら・・・

「・・・雄二は吉井を見習うべき」

もう遅かったか

「翔子あれはただ姫路が勝手にもたれてるだけだからな」

「・・・だから私も勝手にもたれてるだけ」

「いや着いたから離れろ」

「・・・いや」

「我が儘を言うな！！」
「つたくこいつは」

「・・・そんなことより、着いたならこの2人を起こさないとい
けない」

「さすがに起こすのは気が引けるのう」

「僕もちよつとむりかな」

「そんなことを言っていては始まらないから起こすぞ」

「頼んだのじゃ」「よろしくね」

「翔子起こすから離してくれ」

スッ

「おい明久起きろ」

「zzzz後ちよつと」

「口答えするんじゃないねえ」

「はっもう着いたの!？」

右肩に不思議な違和感が・・・

ぼくの肩に姫路さんがもたれかかっている

グハア

可愛い／＼／

ぼくはこんなおいしい状況で寝てたのか

「顔を赤くしながら落ち込むなんて器用なまねをしてないでさっさと姫路を起こせ」

「えっ!？」

ぼくの顔そんなに赤い／＼／

「真っ赤じゃぞ」

「・・・どうせ見とれてた(100円で今の写真を追加する)」

「そんなことないよ（よろしく）」

「・・・（毎度あり）」

「明久俺たちは荷物を下ろしておくから頼んだぞ」

「なるべく早く行くよ」

「さあもったいないけど起こさないかね」

「姫路さん着いたからそろそろ起きて」

「zzzzもうちゅいたんですか？」

「ちゅういた？」

「姫路さんもしかして寝ぼけてる？」

「zzzzそんなことありましえんよ」

「じゃあ降りようか」

「姫路さんがぼくにだっこのポーズをしている」

「姫路さんいったいぼくになにを求めているの？」

「明久くんだっこー」

「そそそそんなこと出来ないよ」

「そんなことしたらほんとに理性がなくなっちゃう」

「やっぱり私が重いから出来ないんですね……」

「そんなことないよ」

姫路さんは太ってないから大丈夫だよ」

「じゃあどうしてなんですか？」

正直泣き顔の上目遣いは卑怯だと思う

「わかったよ姫路さん」

頑張るんだばかりの理性

これは頼まれたからであって他意はないはず……

「明久、荷物を出し終わったんだがまだ……
おっお邪魔しましたー」

「雄二誤解だよ」

「安心しろ明久。」

俺はなにも見てねえ!!」

「違うんだー」

「zzz明久くんどうしたんですか？」

「あつ姫路さんやっと起きてくれたんだね。
それより着いたよ」

「そうなんですか」

「みんなもう先に降りちゃったから早くい」

「もしかして明久くんは私を起こすために・・・」

「ぼくも今起きたところなんだよ」

「じゃあどうして皆さんが先に降りたって知ってるんですか？」

「うっそれは・・・」

「フフ明久くんありがとうございます」

ニコッ

「／／／なんでお礼なんかするの？」

「気にしないでいいですよ」

これは私の気持ちなので

「わっわかったよ」

「では早く行きましょ」

「そうだね」

こうしてやっと温泉にたどり着いた

バス 後半（後書き）

やっと旅館に着きました・・・
本題？に入るのが遅くてすいません。

感想、アドバイスお願いします。

部屋にご案内（前書き）

竜児さん感想ありがとうございます。

やっと旅館に着きました。

と言つことばうござ

部屋にご案内

「大きいね」

「本当に大きいですね」

「荷物を持ってさっさと入るぞ」

「ほら早くしないとおいていくわよ」

「みんな待つてよ」

「当然だけど中も広いのね」

「そうでね。」

美波の胸と違って、
 ぼくの腕があらぬ方向に曲が
 ってる。うううううううううう」

「アキあんたって人は――」

ガキツ

ド
タ
ド
タ

「今すごい悲鳴と音が聞こえたのですが大丈夫ですか!？」

「ああ大丈夫です。」

「気にしないでください」

「そっそっですか……」

「予約をしていた坂本なんですが」

「そうでしたか。」

ようこそいらっしゃいました。

女将の原田と申します」

「よろしく願います」

「そちらの坊ちゃんまはもう大丈夫でございますか？」

「はい」

「いつものことなんで気にしないでください」

「そちらのお嬢さんも照れ隠しにしては過激過ぎますよ」

「てっ照れ隠しなんかじゃありません！」

「ちようでございましたか

ではお部屋にご案内致しますね」

ゾロゾロ

「ねえ雄二、部屋割りはどうするの？」

「5人部屋を2つ借りたから男女でわかれたらいいだろ。」

ちょうど4人ずつになるからな」

「雄二なにを言ってるんだ！
3人と5人じゃないか！！」

「雄二なのであつとるじゃないか」

「えっ！？」

だって女部屋は姫路さん、美波、霧島さん、工藤さん、秀吉じゃない
「ちよつと待つのは」どうしたの、秀吉」

「最後にワシの名前をいれなかったか？」

「だって秀吉は女の子でしょ？」

「ワシは男じゃー！！」

じゃから一緒に風呂も入るし朝は同じ部屋で着替え「ブシャアアア
アアア」るのじゃ？

さつき鼻血が出る音が聞こえた気がするんじゃが・・・」

「ムツツリーニーーーー大丈夫か傷は浅いぞ」

「・・・我が人生に一片の悔いなし」

そんなにいい笑顔で言われたらすごくこまるんだけどね

「なぜ鼻血がでるのじゃ！」

「・・・雄二の前で着替えたら許さない」

「木下くんはもつと自分の魅力を自覚するべきです」

「だからワシは男じゃと言っておるつに」

「あはははは」

やっぱりいつも楽しそうだね。

それはそうとムツツリー二君一緒に着替えたいのなら僕に言ってくれたらいいのに」

ブシャアアアアアア

「ムツツリー二ーーーーー大丈夫か傷は浅いぞ」

「・・・これはただの車酔い」

ムツツリー二今さら車酔いはないと思うよ・・・

「・・・愛子ちよつと顔が赤い」

「／／／／／そんなことないよ」

せつかく恥ずかしさを我慢して言ったのにばれるなんて

「愛子ちゃんそんなに恥ずかしがらなくてもいいですよ。

土屋くんも愛子ちゃんだから喜んでるんですよ」

「・・・そんな事実は存在しない」

「土屋あんたもそろそろ素直になりなさいよ」

「・・・（ブンブンブン）」

「……愛子そんなに落ち込まなくていい」

「落ち込んでないよ。」

いつも通りだよ」

ジ
ト
ー

「そんな目で見ないでよ。」

「ほら部屋に着いたみたいだよ」

「その血を噴いて倒れた子は大丈夫なんですか？」

「いつものことなんで気にしないでください」

「(ン)ブンブン」

ここまで否定出来るのはすごいと思うよ

「それならいいんですけど。」

では気を取り直して、

「この2つが坂本様ご一行のお部屋になっております」

「ありがとうございます」

「晩御飯はその電話で000番にかけていただければ1時間ほどで御用意させていただきます。

ほかになにか質問はございますか？」

「お風呂は何時まで開いているんですか？」

「いつでもご利用いただけます。

その他の施設のご案内はその机の上にある冊子をご覧ください。
あと浴衣を1人1着ずつ用意しておりますのでよろしければご利用
ください」

「ありがとうございます」

「ではごゆると」

はあやつと温泉に入れるよ

部屋にご案内（後書き）

温泉になかなか入れない・・・

これからもがんばりますので応援よろしく願いします。

感想、アドバイスお願い致します。

温泉の定番は卓球だよね（前書き）

唐笠さん感想ありがとうございます。

温泉に入ると思っていたのですが
卓球のことを思いついてしまったので
今回は卓球？をしてもらいました。

つと言つことどうぞ

温泉の定番は卓球だよ

「・・・早くのぞ・・・いや早く風呂に入りたい」

まったくムツツリー二は・・・

「そうだねムツツリー二そうと決まればはやく・・・」

「アーキーまさかとは思いつけど強化合宿のときお仕置きが足りなかったのかしら？」

「そうですよ、明久くん。」

またお仕置きが必要なんですか？」

「いえいえ結構です」

2人とも顔は笑ってるのに目が笑ってないよ

「お主は懲りんのう。」

ところで雄二よ、なにを見ておるのじゃ？」

「ああ温泉のほかにどんな施設があるか見てたんだ」

「どんなものがあつたんじゃ？」

「卓球場・トレーニングルーム・ゲームセンター色々あるぞ」

「雄二、卓球が出来るならお風呂上がりのジュースをかけて勝負しようよ」

「いいだろう。」

その勝負のってやる」

「返り討ちにしてやるよ
みんなはどうするの?」

「ワシも参加しようかの」

「ウチもやるわよ」

「……雄二が行くなら私も行く」

「僕も行くのかな」

「……俺も参加する」

「私も参加してもいいですか?」

「もちろんだよ、姫路さん」
「そんなうれしいことはないよ」

「よしなら卓球のあとそのまま風呂に入ったらいいだろ」

「「「「「はい(うん)「「「「「」

「じゃあ女子はあっちの部屋で準備をしてまたこの部屋にきてくれ」

姫路 side

「浴衣があるんだしみんなで着ようよ」

うつ浴衣ですか・・・

浴衣は太ってるのがばれちゃいます

「・・・わかった」

「ウチもいいわよ」

「浴衣って体のラインがでちゃいますよね・・・」

「・・・瑞希は大丈夫」

「そっだよ着ようよ。」

着たら吉井君もきつと喜ぶよ」

「じゃあ私も着ます」

「みんなも待つてることだし早く行こうよ」

見ていてくださいよ明久くん。

私にも運動が出来るところを見せてあげます

姫路side out

明久side

「それにしても明久。」

卓球の定番と言えば風呂上がりだろ」

「うん。」

だけでもしお風呂上がりに姫路さんたちが浴衣だったらどうなると思う？」

「そりゃあ」

く雄二の想像く

「行きますよ」

「……負けない」

「えい」

「……瑞希は甘い」

ブシャアアアアアア

「……感無量」

く想像終了く

「間違いなくムツツリーニが信じまうな」

「でしょ？」

それにしても姫路さんたち遅いね」

「女の子はいろいろ準備しないといけないんだろ」

「そうじゃぞ明久。」

どうせならこの間にルールなど決めておけばどうじゃ？」

「そうだな。」

まあ１１点マッチでサーブは３本打ったら交代でいいか？」

「いいよ」

コンコン

「・・・来た」

「今でるからちょっと待ってね」

ガチャ

「お待たせ」

「じゃあ行くぞ」

（卓球場）

「ラケットを握るなんて久しぶりだよ」

「そうだな。」

とりあえず軽く打ち合うか」

「そうだね」

カンカン

「そろそろいいだろう」

「そうだね」

「サーブはくれてやるよ」

「その余裕すぐになくしてあげるよ」

「寝言は寝て言え」

「いくよ」

ヒュッ ピンキユウをあげる音

シュッ 空振りしたせいで（わざと）ラケットが飛んでいく音

バコ 飛んでいったラケットを雄二がラケットで防いだ音

チッ

「ごめんごめん手がすべっちゃったよ」

「そうかそれはしょうがないな。

誰にでもあるミスだな。

さあ0-1だ気を取り直してかかってこい」

ヒュッ ピンキユウをあげる音

コンコン 雄二のコートに球がいく音

シュッ 雄二が空振りする音

バコ 飛んできたラケットをラケットで防いだ音

「すまん明久。
手がすべっちゃまった」

「まったく雄二はドジだね。
それじゃあいくよ」

「待て明久。
またすべるかも知れないから次は俺が打ってやるっ」

「そんな次は大丈夫だよ」

「いいからよこせ」

「うるさい」

にらみ合うばかり

「あの2人楽しそうだね」

「・・・いつものこと」

「いっぱい空いてることだしムツツリーニ君あっちで僕とやらない?」

「・・・手加減はしない」

「それでも勝つのは僕だよ」

「それなら島田よ。」

「ワシらも空いてるところで勝負をせんか?」

「望むところよ」

ムツツリside

「・・・いくぞ」

「いつでもいいよ」

カンカン

カンカン

カンカン

「・・・これで8・3」

「ムツツリーニ君なかなか強いんだね」
くっ悔しい

このまま負けるのは癪に触る
こうなったら

「ムツツリーニ君実は僕ね今ノーブラなんだ」

ブシャアアアアアア

今のうちに

カンカン

「・・・卑怯な」

「そんなことないよ」

「・・・この程度では負けない」

「その強がりいつまで持つかな？」

ムツツリside out

明久たちside

「ねえ雄二こんな不毛な争いはやめよ」

「そうだな。」

そろそろ代わるか。

翔子やるか？」

「……私は雄二とペアがいい」

「お前そんな」じゃあぼくと姫路さんがペアだね」ってめえ」

「姫路さんそれでいい？」

「もちろんです!!」

よろしく願います」

「……瑞希・吉井手加減はしない」

「望むところです」

カンカン 霧島さんの打った球が姫路さんのところにいく音

シュツ 姫路さんがからぶる音

タユンタユン 姫路さんの乳が揺れる効果音

タラッ ぼくの鼻から血が出る音

グシャ 雄二が目つぶしを食らった音

浴衣じゃなくてほんとによかった……

もし浴衣だったら……この世にとどまれる気がしない

「ぐわあああ」

「雄二見ちゃダメ」

「はううううどうして当たらないんですか!?!」

明久たち side out

秀吉 side

「ぐわああああ」

「雄二見ちゃダメ」

「はううううどうして当たらないんですか!?!」

やれやれまた騒いだるのう

カンカン

いかんいかん今はこの勝負に集中せねば

カンカン

「島田よ、なかなかやるではないか。
じゃがワシの勝ちじゃな」

11 - 6

「木下、あんた男なんだからちよつとは手加減しなさいよ」

「今お主ワシのことを男として扱ってくれたの」

「今のは成り行きよ!？」

「そんなこと関係ないのじゃ。」

「やっとやっと男として扱ってもらえたのじゃ!?!?!?!?!」
「本気でうれしいのじゃ
いや冗談抜きでこの喜びをわかってほしいのじゃ
なんせ」

「木下あんたそろそろ本気でやばいわね」

男らしい島田に言われたのじゃから

「ねえ木下」

「なんじゃ」

「今ウチのこと男らしいって思わなかった？」

「そんなことないのじゃ」
「なぜわかったのじゃ!？」

「やっぱり思ってるじゃない!?!?!」

「なぜじゃああああ」

ワシの腕がああああ

秀吉 side out

明久 side

「なぜじゃああああ」

今秀吉の魂の叫びが聞こえたよね

鼻血をだしながら工藤さんと卓球してるムツツリーニ

なぜか美波に関節技をかけられてる秀吉

なっなんだこの状況は!?

「ねえ雄二」

「なんだ？」

「どうやったらこの状況になると思う？」

「!!これはなんだ!？」

やっぱりそんな反応になるよね・・・

「雄二これ以上はまずいからみんなを呼んで温泉に行こう」

「そっそうだな」

こうして雄二が強制終了してくれたおかげでなんとかこの場は収まった

そして秀吉

美波のあの技は痛いよね・・・

温泉の定番は卓球だよね（後書き）

スポーツの描写を書くのってとても難しいですねorz

こんな駄文ですが頑張っています。

感想、アドバイスお願いします。

いざ風呂へ（前書き）

唐笠さん感想ありがとうございます。

やっと風呂に入るわけです。

すごく長かった気が・・・

ではどうぞ

いざ風呂へ

「ここが風呂みたいだな」

「……私達はこつち」

「木下くん行きますよ」

「ワシは男じゃー!!」

そしてくんをつけながら女の子扱いするなんていろいろ矛盾しておらんか？」

「確かにそうですね・・・」

じゃあ木下ちゃん行きますよ」

「そういう意味じゃないのじゃあああああ」

なんかこんなやりとりがあつたような・・・
まさか!？」

「見てよ秀吉」

男風呂

秀吉風呂

女風呂

「ここも秀吉を性別として認めているのか!?!?」

そりゃあ驚くよね・・・

「すごく複雑な気分なのじゃ・・・」

「まあ女扱いじゃなくてよかったじゃない」

「そうかのう」

「じゃあ風呂から上がったら晩飯を食べるから男部屋にきてくれ」

「「「「「わかった（よ）（わ）（のじゃ）（わかりました）」「」「」」」」

男子side

「旅館とあつてなかなか広いな」

「・・・こんな広い風呂は初めて」

「いろんな種類のお風呂があるんだね」

「とりあえず全部はいつてみるか」

「そうだね」

「「「「は」」」」

「・・・泡風呂」

「簡単に言えば下から空気の泡が出てくる風呂だ」

「それぐらいさすがのぼくでも知ってるよ」

「いつの間にそんなに賢くなってたんだ!？」

「ムキヤアアア」

「・・・騒いでないでとりあえず浸かろう」

「そうだな」

「なんだか泡がくすぐったいね」

「そうか？」

「なんかプカプカしてて気持ちいいじゃねえか」

「・・・同意」

「いや気持ちいいことはいいんだけどぼくにはちょっとくすぐったいかな」

「この泡があがってくる感じがちょっとね・・・」

「ほんじゃそろそろ別の風呂に行くか」

「そうだね」

やっと解放されるよ

おっ

ぬるま湯

「これってただぬるいだけのお風呂だよね」

「そうだな」

「・・・どうする？」

「せっかくだしもつと珍しいのにしょ」

「そうするか。」

じゃああっちの打たせ湯にでも行くか」

「・・・賛成」

「あーちなみに明久。」

打たせ湯についての説明は必要（ないよ！！）そうか。
なら打たせ湯について説明してくれ」

「ちよつとまつてね」

うたせゆだよね

うたがあるってことはきつと歌が関係あるでしょ
そして・・・せって確か背中のはず・・・

そうか

「わかつたよ雄二！！」

これでぼくはバカじゃないってことを証明出来る

「答えを聞こうか」

「・・・どうせ間違い」

「ふふふ甘いよムツツリーニ。

歌背湯とは人の背中に歌を歌いながら入るお風呂でしょ」(これまでにないドヤ顔)

これでもうぼくのことをバカと言えないだろ

「明久、お前はもういろいろすげえよ」

「・・・予想してたよりもひどい」

「え!？」

「とりあえず行くぞ」

「ちょっと待ってよ」

「これが打たせ湯だ」

「まさかこれって」

「そうだ明久。

さすがのお前でもわかっただろ」

「お坊さんが修行する場所じゃないか!?!」

「「はあ！？？」」

「違うの！？」

「・・・明久、頑張れ」

「なにその応援！？」

「まあ気にすんな」

「なんなんだよー」

「とりあえず打たれようぜ」

「そうだね」

なんか釈然としないけど

「これ気持ちいいね」

「・・・（コクコク）」

「肩のツボにピンポイントで
はー心が安らぐわー」

雄二・・・なんか壊れてない！？

「私は壊れてなどいませんよ」

心が読まれた！？

「私に不可能はありません」

打たせ湯恐るべし

「
すごく気持ちいいですね。
女の子なんてどうでもいいです」

「ムツツリーニあそこで女の子が着替えてるよ」

「
だからどうしたのですか？」

そんなムツツリーニまで

「ほら吉井さんも心を静めましょう」

あっなんだかどうでもよく・・・

数分後

「俺は今までなにをしていたんだ!？」

「・・・すごいことになっていた気がする」

打たせ湯恐るべし

「とりあえず他のに入ろうよ」

「・・・寝風呂がある」

「それは良さそうだな」

「早速行こうよ」

「だな」

「この格好はzzzz」

「おーい明久？
なんだ寝ちまったのか」

「・・・さすがにあぶない」

「起こすのも面倒だしその足湯に浸かりながら見張るときゃあいだろ」

「・・・のぼせなくてすむ」

zzzzしまった！！
また寝ちやってた

「やっと起きたか」

「・・・待ちわびた」

「ごめんごめん」

「まあいいさ。」

足湯を堪能出来たしな」

「そうなんだ。」

じゃあ次は露天風呂に入ろうよ」

「おっいいな」

「・・・女風呂をのぞける場所がない」

そりゃそうでしょ

「露天風呂ってよく猿が一緒に入ってきたりするけどさすがにいいよね」

「そりゃそうだろ」

「ゴリラはいるんだけどね（笑）」

「てめえいい度胸だな。」

そっいえば勝負がついてなかったな」

「そうだね。」

どうやって決める？」

「・・・だったらサウナで勝負」

「そうするか」

「望むところだよ」

「最後まで残ってたやつ勝ちだぞ」

「コクコク
了解」

「ムツツリーニ、言い忘れていたが・・・
隣は女風呂だぞ」

ブシャアアアアアア

「・・・のぼせただけ。
先に出て涼んどく」

サウナ組 side

数10分後

「明久そろそろ限界じゃないのか？」

「雄二こそ目がうつろになってきたよ」

「バカ言え。」

俺は元々こうだ」

「強がりなんか無駄だよ」

「てめえこそな」

ガンのくれあい

サウナ組 side out

ムツリーニ side

さすがにあの鼻血の量はまずかった
とりあえずぬるま湯に浸かって休憩だな

数10分後

ぬるま湯も案外気持ちいい
そろそろ出てくると思うんだが・・・
一応見に行くか

お互いを睨みながら気を失ってる2人
・・・

「これはまずいだろおおおお」

ムツリーニ side out

ムツリーニが発見してくれた後水風呂に投げ込んでくれたらしく
ぼくらは助かった

「ありがとうムツツリーニ助かったよ」

「ほんとにな、悪かったなムツツリーニ」

「・・・本当に焦った」

「まあそろそろあがって部屋に戻るか」

「「そうだね（コクコク）」」

ぼくたちは部屋に帰っていった

男子side out

秀吉side

秘密なのじゃ

秀吉side out

女子side

「見ちゃダメです」

「そうよそうよ」

「・・・雄二は私以外見ちゃダメ」

「見たいんだったら見てもいいよ」

だだしばれないようにね
「

「ばれないようにしても見ちゃダメです!~!」

女子 s i d e o u t

ごちそう楽しみだな〜

いざ風呂へ（後書き）

すいません。

むさ苦しくなってしまいました・・・

なんせ女子のお風呂シーンなんて想像出来なかったのでorz

感想、アドバイスお願いします。

風呂あがり（前書き）

引っ越しやら

部活やらで更新遅れてしまいました。

いつも以上に駄文になってるかも知れませんがどうぞ

風呂あがり

「秀吉たち遅いね」

「まあそのうち来るだろ」

コンコン

「今開けます」

ガチャ

「あつ秀吉」

「すまぬ。」

「待たせたのじゃ」

「気にしないでいいよ。」

「そんなことより中で話そうよ」

「そうじゃな」

「おー秀吉か。」

「風呂はどうだった？」

「風呂の種類は凄かったのじゃが、

隣からムツツリー二の叫び声が聞こえてきたり、

反対側からは島田らの声が聞こえてきて寂しかったのじゃ……」

「それはゴメンね」

「・・・それは悪いことをした」

「また後で一緒に入るか」

「本当かの!？」

今から(・・・雄二、誰と一緒に入るって?) すまぬ雄二よ」

「翔子待て。」

これには深いわけがああああああ」

「・・・ほかの人の裸を見るなんて許さない」

雄二、本当にこりないね

ってというか霧島さんはいつ来たんだろう？

「ねえ瑞希、

なんだかお仕置きが必要な人がいる気がするんだけど」

「奇遇ですね美波ちゃん、

実は私もそう思ってたんですよ」

「二人ともいつのまに!？」

ぼくをどうする気なの??

ちよっ待って

いやああああああ」

「じゃあムツツリー二君僕たちは後で一緒に入るっか」

ブシャアアアア

「ムツツリー二君どうしたのかな？
もしかして僕の裸を想像しちゃったのかな？？」

チラッ

ブシュ

「・・・これはのぼせただけ」

「ムツツリー二今その言い訳は辛いぞい。
そうじゃ雄二、

晩御飯を頼んでおいたほうがいいかの？」

「頼む」

「・・・まだ元気」

「だからといって力を強めるなああああ」

「了解じゃ。」

皆のもの今から電話するからしばし静かにしておいてくれんかの？」

「翔子そういうことだから離してくれ」

スッ

「・・・ちゃんと反省するように」

「姫路さんたちも頼むよ」

「明久くんもちゃんと反省してくださいね」

「アキ次やったらわかってるわよね？」

ニコッ

「「はい」」

「では電話するぞい」

ブルルル

「はいフロントでございます」

「晩御飯をお願いしたいのですが」

「わかりました。」

「代表者の指名をお願いします」

「坂本です」

「坂本様ですね？」

「はい」

「ではあと30分ほどでお届けいたします」

「お願いします」

「じゃあ食つか」

「そうだね」

「これはどうやって作るんでしょうか？」

!!!!!!!!

「姫路さんそんなことより食べようよ」

もし作る言われちゃったら僕たちの命が・・・

「（明久よくやった）」

やっぱりみんな考えることはいっしょだね

「そうですね。」

冷めないうちに食べちゃいましょう」

こうして無事美味しくご飯を食べることが出来た

本当に美味しかった

風呂あがり（後書き）

ホントにすいません。

ぐたぐたになってしまいましたorz

次からはこれまでに以上に頑張るので応援よろしくお願いします。

感想、アドバイスもお願いします。

それぞれの部屋（前書き）

書くことがまとまらず

更新また遅れてしまいましたorz

遅くなりましたがどうぞ

それぞれの部屋

〈男部屋〉

姫路さんたちが部屋を移動してから
みんなで布団を敷いたわけだけど

「眠れない。

ねえ誰か起きてないの？」

グーガーグーガー

「誰も起きてないのか・・・」

どうしよ

・・・せつかくだしお風呂にでも行こうかな
そうしてぼくは部屋をでていった

〈女部屋〉

「なるほど土屋くんとそんなことが」

「もっもっ僕寝るね」

「・・・愛子恥ずかしがらなくてもいい」

「そんなんじゃないよ！

ただはしゃいで疲れたただだよ」

「瑞希どうしたの？」

「へっ！？

どうしたんですか？」

「もしかして瑞希ちゃんもなにか隠し事かな？」

「そんなことはありませんよ。

ちよつとボーツとしてるので風にあたってきますね」

ガチャッ

「いつちやたね」

「……じゃあ私も行ってくる」

「どこに？」

「……雄二のところ」

「じゃあ僕も行こうかな」

「二人とも積極的ね。
ウチは寝ておくわ」

「おやすみ」

「……おやすみ」

明久side

お風呂からあがって

さっぱりしたのはいいんだけど

「どうしょ・・・」

部屋に戻っても眠れないし

とりあえず外で散歩でもしようかな

そしてぼくは外に向かった

ぼく（私）の夜は長くなりそうだ（です）

それぞれの部屋（後書き）

想像以上に短くなってしまいました。

いろいろ考えたのですがどれも話がまとまりませんでした。
自分の才能の無さになさけなさを

感じました。（泣）

それでも読んでくださって本当に感謝です。

感想、アドバイスお待ちしております。

瑞希の想い（前書き）

きるぐまー1号さん感想ありがとうございました。

更新の頻度が週一になりつつあるきが・・・
もっと早くできるようがんばります。

ではどうぞ

瑞希の想い

明久side

眠れないからぼくは一人、外で夜空を眺めてた

「このあとどうしようかな」

たまにはこんな落ち着いた雰囲気もいいかもしれない

クシユクシユ

誰かが落ち葉を踏む音がする・・・

誰かきたのかな？

そんなことを思いながらその足跡のするほうへ向かってみた

姫路さん！！？

いや姫路さんがいるのは別に不思議じゃないんだけど

月光で光ってる涙はなぜ？

とりあえず姫路さんのところに行かなきゃ

たとえ姫路さんがそんなこと求めていなくても

明久side out

姫路side

「やつぱり外は静かですね」

今はこの静けさが心地いいです

皆さんは自分とつりあった相手といれて幸せものです

それに比べて私は・・・

「姫路さん、なにかあったの？」

「あつ明久くん！？」

「びつくりさせちゃってごめんね」

「気にしないでください」

「本当に？」

それならよかったよ。

ところで大丈夫？」

「？どういうことですか？」

「姫路さんが泣いてるからなにかあったのかと思って・・・」

「えっ！？」

なんでばれてるんですか！？」

「ぼくでよかったら話を聞かせてもらえないかな？」

「えっと・・・それは」

さすがに本人の前では

「そうだよね。」

ぼくなんか話しても意味ないよね」

どうしてそんな顔をするんですか？

私は明久くんの悲しそうな顔は見たくありません

「そんなことないですよ。」

明久くんはいつも頼りがいがありますよ。

ただ・・・」

「ただ？」

「これはその私が勝手に悩んでるだけなので」

「そうなんだ。」

でも姫路さん、話せば楽になることもあるよ」

ああ、この笑顔が私に勇気を与えてくれてるんですね

「そうですね。」

じゃあ明久くん聞いてもらえますか？」

「ぼくでよかつたらいくらでも聞くよ」

「ありがとうございます。」

私たちが部屋に戻ってから好きな人の話をしていたんです。

私以外の皆さんはとっても魅力があると思ったんです。

ですが私にはそんな魅力はありま（そんなことないよ、姫路さん）
へ？明久くん？」

「姫路さんには魅力がたくさんあるよ」

「そんなことはありません！

私はドジでのろまで体が弱くて・・・」

自分の不甲斐無さに涙が・・・

ギョッ

「／／あつ明久くんどうしたんですか？」

なんで突然抱きしめてくれたんですか？

「姫路さんいやだったら言ってね」

「そんな嫌なわけないじゃないですか」

「ありがとう。」

「じゃあこのままぼくの話聞いてね」

「はい」

「さつき姫路さんは自分に魅力なんてないなんて言っていたけど・・
・そんなことないよ。」

「少なくともぼくは・・いやぼくらは姫路さんの魅力を知っているよ。
だからそんな悲しそうな顔で悲しいことを言わないでよ。」

「それに姫路さんに魅力がないのならぼくはどうなるのさ？
ぼくは悔しいけどバカだし、雄二みたいに強いわけでもないし」

「そんなことはありません！！」

「明久くんはとっても優しいです。」

「それにいつも周りを楽しい雰囲気にしてくれます。」

「それに引き換え私は・・・」

「ありがとう、姫路さん。」

「姫路さんの魅力の一つはそのやさしさだよと思うよ」

「そんなことはありません」

「これは私の本音です」

「それにいつも周りのことを気にかけることが出来るじゃないか」

違います

私はいつも迷惑をかけているので
それをきにしてるだけなんです

「だから姫路さんぼくはそんな姫路さんが」

「すいません。

明久くん聞こえませんでした」

「いいよ、姫路さん気にしないでぼくの独り言だから」

「わかりました」

いまかすかに大好きって聞こえた気が・・・

「最後に姫路さん。

恋愛は釣り合っているかどうかなんて関係ないと思うよ。
もし自分が相手を好きになったらそれでいいと思うんだ。
ぼくはバカだからそんなことしか言えないけどそれがぼくの本心だよ」

「そう・・・ですね」

「励みになったかどうかかわからないけど元気出してね」

「はい。

明久くん最後にお願ひがあるんですけど・・・いいですか」

「ぼくに出来ることなら何でもするよ」

「ありがとうございます。」

もうすこしこのままでいてください」

もう少しだけあなたのぬくもりを感じさせていてください

「／／／そんなことでいいならどうぞ」

「ありがとうございます」

この笑顔に何度助けられてきたことが

「姫路さん、大丈夫？」

「はい、もう大丈夫です。

ありがとうございます」

やっぱり私は明久くんを好きになってよかったです
私では釣り合っていないかも知れませんが
もうそんなこと気にしません

やっぱり私姫路瑞希は吉井明久くんが大好きです

「じゃあそろそろ部屋に戻ろうか」

「そうですね」

そうして私たち二人は旅館に戻っていきました

瑞希の想い（後書き）

シリアスってむずかしい！！

本当に自分の文才のなさを恨むばかりです・・・
とまあ愚痴はこのぐらいいにして

どうでしたでしょうか？

一応明久と瑞希のラブシーンのつもりです
次は明久視点で書くつもりです。
そちらももしよければお願いします。

感想、アドバイスお願いします。

明久side（前書き）

唐傘さん感想ありがとうございます。

地文を書き換えただけなので早く更新できました。

ですので、同じような内容が続いてしまいましたorz

ではどうぞ

明久side

明久side

「姫路さん、なにかあったの？」

「あつ明久くん!？」

「びつくりさせちゃってごめんね」
「やっぱり泣いていたんだね」

「気にしないでください」

「本当に？」

「それならよかったよ。」
「ところで大丈夫？」

「?どういうことですか?」

「姫路さんが泣いてるからなにかあったのかと思って・・・」

「えっ!？」

「ぼくでよかったら話を聞かせてもらえないかな？」
「あなたの不安をちょっとでも取り除きたいから」

「えっと・・・それは」

「そうだよね。」

「ぼくなんかに話しても意味ないよね」

「やっぱりあなたはそんなことは望んでないんだよね・・・」

「そんなことないですよ。」

「明久くんはいつも頼りがいがありますよ。」

「ただ・・・」

「ただ？」

「これはその私が勝手に悩んでるだけなので」

「そうなんだ。」

「でも姫路さん、話せば楽になることもあるよ」

「そうですね。」

「じゃあ明久くん聞いてもらえますか？」

「ぼくでよかったですらいくらでも聞くよ」

「姫路さんの泣き顔が消えるならいくらでも」

「ありがとうございます。」

「私たち部屋に戻ってから好きな人の話をしていたんです。」

「私以外の皆さんはとっても魅力があると思ったんです。」

「ですが私にはそんな魅力はありません（そんなことないよ、姫路さん）へ？明久くん？」

「姫路さんには魅力がたくさんあるよ」

「あなたはぼくと違ってたくさんの魅力をもっているんだからそんなこと言わないでほしい」

「そんなことありません！」

私はドジでのろまで体が弱くて・・・」

やっぱり姫路さんはいつまでも自分に自身が持てないんだね・

姫路さんが涙を流しながらうつむいている・・・

どうやったらいいんだ

そんなことを考えているうちに

足が勝手に一歩また一歩と姫路さんに近づいていった。

そして・・・

ギョッ

「／／あつ明久くんどうしたんですか？」

「姫路さんいやだったら言ってね」

どうしてだろう？

なぜだか今はこうしてあげるのが姫路さんのためになる気がして

「そんな嫌なわけないじゃないですか」

「ありがとう。」

じゃあこのままぼくの話聞いてね」

「はい」

「さっき姫路さんは自分に魅力なんてないなんて言っていたけど・・・
・そんなことないよ。

少なくともぼくは・・・いやぼくらは姫路さんの魅力を知っているよ。
だからそんな悲しそうな顔で悲しいことを言わないでよ。

それに姫路さんに魅力がないのならぼくはどうなるのさ？

ぼくは悔しいけどバカだし、雄二みたいに強いわけでもないし」

あなたにふさわしいわけがない

「そんなことはありません!!」

明久くんはとっても優しいです。

それにいつも周りを楽しい雰囲気にしてくれます。

それに引き換え私は・・・」

「ありがとう、姫路さん。

姫路さんの魅力の一つはそのやさしさだよ思う。

それにいつも周りのことを気にかけることが出来るじゃないか。

だから姫路さんぼくはそんな姫路さんが」

ぼくと違って本物の優しさを持っていて、

みんなのことを気にかけることのできる抱擁力のあるそんな心を持っている

姫路さんが大好きだよ

「すみません。

明久くん聞こえませんでした」

「いいよ、姫路さん気にしないでぼくの独り言だから」

そう、

聞こえた瞬間に終わってしまうぼくの勝手な片思いだから

「わかりました」

「最後に姫路さん。

恋愛は釣り合っているかどうかなんて関係ないと思うよ。

もし自分が相手を好きになったらそれでいいと思うんだ。

ぼくはバカだからそんなことしか言えないけどそれがぼくの本心だよ」

そう信じていないとつぶれてしまいそうだから・

だからこれはぼくが自分に言い聞かせていることなんだ
じゃないとぼくにはあなたを好きでいる資格すらないから・

「そう・・・ですよね」

「励みになったかどうかわからないけど元気出してね」

「はい。」

明久くん最後にお願ひがあるんですけど・・・いいですか」

「ぼくに出来ることなら何でもするよ」

「ありがとうございます。」

もうすこしこのままでいてください」

「ノノそんなことでいいならどうぞ」

姫路さんが喜んでくれるなら

それにこうしているとあなたのぬくもりを感じていられるから

「ありがとうございます」

「姫路さん、大丈夫？」

離れてこのぬくもりを手放すのは残念だけど

ぼくのわがままであなたに迷惑をかけたくはないから・・・
それに

「はい、もう大丈夫です。
ありがとうございます」

離ればあなたの笑顔を見ることができからいいんだ
「じゃあそろそろ部屋に戻ろうか」

「そうですね」

やっぱり姫路さんの笑顔は最高だよ
いつかは伝えたいこの気持ち
でもまだ言えない
もしばくに勇気がでたら伝えるからそのときは答えてね

そこから姫路さんを部屋に送って行って部屋に戻っていった

「今日はいい夢が見れそうだな」

明久side（後書き）

やっぱり難しい・・・

そして読みにくい・・・

頑張らねば。

こんな読みにくいものを読んでいただきありがとうございます。

もう少しでラストなので頑張ります。

感想、アドバイスお願いします。

部屋での出来事（前書き）

ゆーさん感想ありがとうございます。

終わりに向けてがんばってるのですがなぜかぜんぜんかけないとい
う・・・

いつも以上にぐだぐだかもですorz
ではどうぞ

部屋での出来事

??? side

「ねえ代表、もし鍵がかかってたらどうするの?」

「……鍵ぐらいすぐに開けれる」

「さすが代表だね」

「……それより着いた」

「ほんとだね」

ガチャ

「あれ鍵が閉まってないみたいだね」

「……手間が省けた」

「じゃあ入ろうか」

「……うん」

「代表はやっぱり坂本君のところに行くの?」

「……もちろん」

「じゃあ僕もムツッリーニ君のところに行こうかな」

「・・・愛子も頑張つて」

「ありがとね。」

「じゃあまた後でね」

「??? side out」

愛子&ムツツリーニside

「ねえムツツリーニ君起きてるんでしょ？」

僕とお話でもしようよ」

「・・・zzz」

もーこうなったら

「ムツツリーニ君実は僕ノーブラなんだ」

ブシャアアアア

「やっぱり寝てても反応するんだね」

「・・・工藤どうしてここに？」

「特に用事はないんだけどちょっとムツツリーニ君としゃべりたい
と思うて」

「・・・目も覚めたから別にいい」

「やったー」

「じゃあ猥談でもする？」

「・・・猥談」

ブシャアアアア

「・・・猥談もしたいがもっと良いことが起こってる予感がする。すまないが少し行ってくる」

「僕も行つていい？」

「・・・足を引っ張るなよ」

「もちろんだよ」

「・・・こつちだ」

愛子& amp・ムツツリーニside out

翔子& amp・雄ニside

「・・・雄ニ見つけた」

「zzzz」

「・・・勝手に隣で寝るからいい」

スッ

「つしよ翔子なんでここにお前がいるんだ」

「・・・夫と寝るのが妻の定め。」

それに今日は旅行だからいつもより長く一緒にいられる」

「ノノノお前よくまあそんな恥ずかしいセリフを・・・
しゃあねえ今日だけだぞ」

「……………うん」

パシャパシャ

「……ムツツリーニてめえ」

「……俺に構わず続けてくれ」

「これ以上は何もしねえ。

そして翔子がつかりするのはやめてくれ」

「ムツツリーニ君もう気付かれたから良いでしょ」

「なに工藤もいるのか!？」

「そうだよ。

じゃあムツツリーニ君あっちでお話しよ」

ブシャアアアア

「ったくなんでお話で鼻血がでるんだよ」

「……………雄ニ早く寝よ」

「いや待て翔子。

工藤とかが見てるから今日もなしだ」

「……………雄ニの嘘つき。

こうなったら実力で一緒に寝て見せる」

「待てその発言はあああああ

俺の腕があああああつあああlll」

翔子& amp; 雄二side out

秀吉side

「・・・雄二の嘘つき。

こうなつたら実力で一緒に寝て見せる」

「待てその発言はあああああ

俺の腕があああああつあああlll」

「うるさくね眠れにやいのじゃ。

隣の部屋で寝るとしようかの」

ガチャ

「やっぱりこっちはしずかじゃの」

「きつ木下なんであんたがここに」

「zzzおおすまぬ、島田よ。

こっちで眠らせてほしいのじゃ」

「どどどどつことよ」

「zzz深い意味はないのじゃが、

ワシらの部屋がうるさくて眠れないのじゃ」

「そついうことね。

それならいいわよ」

男の子として見えたときに限って
ちよつとあせつちやつたじゃない

「zzzz恩にきるのじゃzzzz」

「困ったときはお互い様よ」

「zzzz」

「けど寝る前にちよつとお話しない？」

「zzzz」

「ふふ、よっぽど疲れてるのね。

おやすみなさい、秀吉」

そして雄二たちのいちやつき？は一日中続いた。

部屋での出来事（後書き）

感想、アドバイスお願いします。

明久たちの朝（前書き）

更新遅くてすみません。

それではどうぞ

明久たちの朝

チュンチュン

明久side

「これはまだ夢の続きかな？」

ぼくの隣に姫路さんの寝顔があるなんておかしいはずだ！

落ち着け落ち着くんだぼく

落ち着いて昨日の出来事を思い出すんだ！

（昨日の晩）

「じゃあ姫路さんまた明日ね」

「はい。」

吉井くんおやすみなさい」

「おやすみ姫路さん」

こうしてぼくは確か自分の部屋に戻って行った
でも帰ってみると

「・・・雄二今日こそ一緒に寝る」

「待て翔子。」

落ち着くんだ！」

ムツツリーニはムツツリーニで

工藤さんと話をしているし

「こんな空間ぼくには入れない！！」

そんな時

P r r r r

「もしもし。」

どうしたの姫路さん?」

「もしかしたら明久くんが寝る場所がないと思ひまして」

「姫路さんよくそんなことわかったね」

「ですから私たちの部屋にきてください」

「いつていいの!?」

「もちろんですよ」

「ありがとう。」

じゃあ行かしてもらつよ」

「お菓子でも準備して待つてます」

「じゃあまた後でね」

「はい」

プープープー

今日はなんてラッキーな日なんだろう

姫路さんとさらに親密な仲になれたうえに一緒に部屋にいられるな

んて

「おっと。」

こんなことしてないで早く行かなきゃ」

コンコン

「姫路さん入るよ?」

「どうぞ」

「お邪魔します」

「ちょっと汚いかも知れませんがどうぞ」

「ありがとうございます。」

それにしても姫路さん助かったよ」

「気にしないで下さい。」

それよりも明久くん、飲み物いりますか?」

そう言つてぼくに飲み物を勧めてくる姫路さん

「じゃあせっかくだしもらつていい?」

「もちろんです」

「ありがとね」

「明久くん乾杯しませんか?」

「そうだね、せっかくだしやろうか」

「カンパイ」

ゴクゴク

このほろ苦ーい感じは・・・

「これ酒じゃないか!？」

「ちらいますよ、明久くん」

「姫路さんもしかしてすでに酔ってる？」

「ひょんなことありましえん」

どうしよう・・・

これはまずいパターンだ

「明久くん!！」

「はい!？」

「一緒に寝ましょー」

ギュッ

「ちょっとちょっと待って姫路さん」

いろいろヤバいところが当たってるんだけど

「待ちません」

そういいながら押し倒されるばく

女の子に押し倒されるなんてなんて非力なばく
って今はそんなこと考えてる場合じゃない

「姫路さん落ち着いて。
それはさすがにまずいって」

スースー

「って寝ちゃったのか」
まあ疲れただろうからしょうがないかな
あつばくもなんだか眠くzzz

く回想終わりく

「ヤバいとっても恥ずかしい」

「あつ明久くんおはようございます」

「おはよう姫路さん」

ばくは出来るだけ平常心を保ちながら挨拶をした

ポッ

しばらくすると姫路さんも思い出したらしく顔を真っ赤にしていた

「オハヨーってどうしてこの部屋にアキがいるのよ!？」

「これには深い事情が」

「それにどうして瑞希と一緒に寝てるのよ!？」

「朝っぱらからうるさいのじゃ」

「あれ？」

秀吉もこっちにいたの？」

「あつちの部屋がうるさくなつたからこっちに避難させてもらったのじゃ」

「それは大変だったね」

「そうじゃ明久。」

まだ時間もあるようじゃし朝風呂にでもいかんか？」

「いいね行こうよ」

「明久くんまさかとは思いますが一緒にいたりなんかしませんよね？」

「もつもちろんだよ」

「また独りで入るのかの・・・」

「そんな悲しそうな顔しないでよ。」

「・・・そうだ水着を着たらセーフなんじゃない？」

「それならまあ大丈夫ですかね」

「そうね、それじゃあ瑞希あたし達も行きましょ」

「そうですね」

そうして僕らはお風呂に向かった

明久たちの朝（後書き）

感想、アドバイスお願いします。

旅行は家に帰るまでが旅行です（前書き）

どうぞ

旅行は家に帰るまでが旅行です

坂本夫婦 side

「……雄二もう朝」

「そうかもう朝だったか・」

「つて翔子俺はいつの間に寝てたんだ!？」

「……雄二が叫び終わってから」

「くそ疲れごときにまけるなんて」

「……疲れてたからしょうがない。

しかも……」

ポツ

「てめえいつたい何をしたんだ!？」

「……そんなこと言わせるなんて雄二のエッチ」

「本当に何をしたんだ!??？」

「……そんなこと恥ずかしくて言えない」

「はあもういい。」

「ところで明久と秀吉の姿が見えないんだが」

「……私が起きたときにはいなかった」

「まあすぐ帰ってくるだろうからいいか」

「……じゃあ雄二もう一回一緒に寝よ」

「まず一緒に寝てないからな!？」

ポッ

「ほんとに何をしたんだあああああああ
坂本夫婦 side out

ムツツリーニ・愛子 side

「ほんとに何をしたんだあああああああ」

ムク

「……まったく朝からうるさい」
「なんだ隣に違和感が……!？」

「ん」

タラッ

「……この寝顔は反則」

「んーおはようムツツリーニ君」

「……おはよう、よく眠れたか？」

「ばっちりだよ。」

「それより鼻を押さえてるけど鼻血は大丈夫？」

「・・・問題ない」

「よかった」

「／／／心配をかけてすまない。
それより明久と秀吉がいないようだが」

「ああ弟君は女子部屋に行つて、
吉井君は僕たちがいちゃいちゃ？してたから入れないでどこかに
いっちゃったよ」

「・・・そうかまあいいか。
そして俺たちは別にいちゃいちゃしてたわけではない」

「照れなくていいよ」

「・・・（ブンブン）
それより顔が少し赤いが大丈夫か？」

「／／／大丈夫だよ」

「・・・それならいい」
ムツツリーニ・愛子 side out

明久・秀吉 side

「いい湯じゃったの」

「そうだね」

「やっぱり一人で入るよりいいのじゃ」

「それはよかったよ」

「部屋に帰ったら帰る準備をやらなきゃならんのう」

「そうだね」

ガラッ

「ねえ秀吉この空間に入れる？」

また雄二たちがいちゃついてる・・・

「わっワシには無理じゃ」

「だよね・・・」

どうしよ

「おおその声は明久じゃねえか。
頼む助けてくれ」

「・・・雄二逃がさない」

「霧島さんは本当に一途だね。
だけどちよつと雄二と話させてくれるかな？」

スッ

「ふう、明久助かった」

「そんなことはいいよ。
それよりいつ出発するの？」

「そうだな。」

もう少しでチェックアウトの時間だからそろそろ準備はしておいてくれ」

「了解。」

じゃあ霧島さんあとはお好きにどうぞ」

「……そうする」

「明久てめえなにを」

「さあ秀吉ばくらは帰る準備でもしようか」

「そうじゃの」

「スルーしてんじゃねー……」

「しょうがないな。」

霧島さんまたバスと一緒に座るからとりあえず離してあげて」

「……わかった。」

雄二続きはまた後で」

「続きつてなんだ!？」

ガラッ

「おいコラ待て。」

「・・・しゃあねえとりあえず帰る自宅をするか」

「そうじゃの」

「じゃあ終わったらロビーに集合だ」

「了解」

（30分後）

「よし全員集まったな」

「みんな忘れ物はない？」

「「「「「大丈夫（やじです）（よ）」「」「」「」」

「じゃあバスに乗って出発だ」

バスの中では行きよりカオスになってたのは言うまでもない

「到着です」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「・・・私はこのまま雄二の家にいるからこれで」

「よしじゃあ俺は明久のい（雄二）浮気はゆるさない（え）には行かないで家でのんびりしようかな」

「まったくお主は素直じゃないのう」

「ウチはこっちだから」

「ワシも同じ方向じゃ」

「それじゃあ一緒に帰りましょ」

「そうじゃの。」

では皆のものまた明日なのじゃ

「じゃあまた明日ね」

「ムツツリー二君家まで送ってよ」

「・・・かまわない」

「やったー」

「・・・また明日学校で」

「みんなまたね」

「じゃあ姫路さんばくたちも帰ろつか」

「はいそうですね」

「じゃあ雄二、霧島さんと仲良くね」

「うるせえ」

「照れなくてもいいよ。
じゃあまた明日ね」

そうして姫路さんの家に着くまでぼくらはたわいのない雑談に花を
咲かせた

「じゃあ姫路さんまた明日ね」

「あつ明久くん待ってください」

「どうしたの？」

チュッ

「ひひひ姫路さん！？」

「／／／／これは相談にのってくれたお礼です。
それじゃあ明久くん、また明日です」

愛子ちゃんも積極的になったことですし私も・・

「／／／うんそれじゃあね」

ついに楽しい旅行も終わっちゃった・・

まあいいかきつと姫路さんやみんなとなら毎日楽しく過ごせるから
また明日から学校がんばろう

旅行は家に帰るまでが旅行です（後書き）

今までありがとうございました。

こんな駄文に付き合ってくださり誠にありがとうございました。

最後までぐだぐだでしたが何とか終わりを向かえることが出来ました。

物語はこれで終わりですが、バカテスとを入れる予定ですのでよろしければそちらもお願いします。

エピソード（前書き）

唐笠さん感想ありがとうございます。

これでいよいよ最後です。

それではどうぞ

エピソード

問題

温泉旅行の感想を述べて下さい。
ただ全略などは禁止とします。

土屋君の答え

工藤愛子がかわい・・・いや特になにもなかった。

先生のコメント

もっと素直になってください

工藤さんの答え

みんなと親睦を深めることが出来ました。

先生のコメント

いつもの工藤さんらしくない答えで驚いています。
何度も消した跡があるのとなにか関係があるのでしょうか？

工藤さんのコメント

康太君への気持ちに気付いたなんて書いてないよ。

先生のコメント

見事な自白をありがとうございます。

木下君の答え

ついに男扱いされたと思ったら秀吉という性別が世間に認められている事実があると知り嬉しいような悲しいような旅行だった。

先生のコメント

秀吉という性別を否定できない先生を許して下さい。

島田さんの答え

正直瑞希が羨ましかった。

ただ木下を男として見ている自分を知り、いろいろ気付かされた旅行となった。

先生のコメント

自分を見つめる事は大切なので島田さんにとっては意義のある旅行になったと思うのでよかったです。

霧島さんの答え

お風呂以外雄二といられて嬉しかった。

今度はお風呂も一緒に入りたい。

先生のコメント

坂本君と末永くお幸せに。

坂本君の答え

翔子についていろいろ考えさせられた。

早く俺の気持ちにけりをつけないといけないと思わされた旅行になった。

先生のコメント

悩むことも人生なので大いに悩んでください。

先生はいつでも相談にのります。

坂本君の質問

先生、早速で悪いんだが

押した覚えのないハンコが押されている婚約届けを持っている幼なじみに結婚を迫られている時はどうすればいいですか？

先生の答え力不足の先生を許してください。

姫路さんの答え

今回の旅行では皆さんとさらに親睦が深まったと思います。

明久くんにもたれかかるなどいろいろ大胆になることが出来たと思います。

また明久くんが言ってくれたように釣り合う釣り合わないは気にしないようにしようと思いました。

だから私はこれから明久くんと一緒にいられるように努力していきましょうと思います。

結果的には明久くんへの気持ちを再認識した旅行になりました。

吉井君の答え

姫路さんと密着するなどいろいろあったが姫路さんの本心を聞けたのでよかったと思う。

これから姫路さんと一緒にいられるように頑張ろうと思いました。

先生のコメント

君達二人は付き合っていないんですか！？

二人のコメント

ぼく（私）なんかが付き合えるわけじゃないじゃないですか

先生のコメント

もう好きにしてください

先生の総評

私は大人なので羨ましいなんて思っていない。
だから腹いせに宿題をだしたわけではありまん。

エピローグ（後書き）

いままでお付き合いいただき誠にありがとうございました。
こんな駄文に付き合っていただけで本当に感謝感激です。

また小説を書く機会があればよろしくお願いします。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6404v/>

バカたちの温泉旅行

2011年10月19日02時09分発行